

印象12編 — 2021年3月の総評に代えて

○林 桂○

・新しい年度の最初の投稿月である。投稿数も落ち着いて、新たな作者の名の登場も見える。気持ちを新たに読ませていただいた。

●風船●(東京都)

水仙の球根持って
ぼくひとり

*水仙の植え付け用の球根を手に入れている。植え付けは孤独で小さな作業。自己完結的な球根という形もどこか寂しい。ともに、花開く姿の幻想で支え合っているようだ。

●阿部圭吾●(千葉県)

ジョギングで
迷って遠く見るときの
あんなところにある焼却炉

*ジョギングで道に迷って、自分の居場所を見つけるために、見なれた風景を遠目に探す。しかし、見つけたの見なれない焼却炉。迷子の思いは深まるばかりだ。

●翠●(東京都)

哺乳瓶がすてられたことを
知らずにおとなになっている

*子育てしながら、不要になったものは処分してゆく。当然、哺乳瓶も処分されたはずである。そういうことに思いを馳せることなく、誰も成長してゆく。おそらく、親と同じ育てるという体験を迎えて、その事実には思いが及ぶようによくなるのだろう。

●春町美月●(大阪府)

なんだかんだで結局
オロナインを信じている

*白黒テレビ時代の浪花千栄子らのオロナイン軟膏のCMをまだ覚えている。汎用性の高さが謳われていて、子供心に取りあえずオロナインを塗っておけば大丈夫と思って育ち、今も愛用している。しかし、作者はそれより若い世代であろう。母親世代からの伝播だろうか。

●春町美月●(大阪府)

社会の先生の自慢は
お兄さんが
阪急電車の車掌さんてこと

*小学校の社会科の先生が脱線授業で、お兄さんが阪急の車掌さんであることを自慢し、それを今も覚えているのだ。本科の授業よりも逸脱したおしゃべりの方が印象深く残ったりする。生徒にとって、社会科の先生よ

りも、阪急の車掌さんの方があこがれの職業だったのだろう。先生もそれを知っての脱線授業である。

●風船●(東京都)

燕の巣じっと見守る母が好き

*折々、燕の子育てを眺めている母。同じく子育てをする者としての共感と励ましの眼差しなのだろう。それは自分に向けられてきた眼差しでもある。だから「母が好き」なのだ。

●風船●(東京都)

家政学部に入りたい男の子だって
いるんじゃないか

*家政学部は、女子大学にしかない学部だろう。共学の家政学部はないと思われる。男性の家政学者が増えれば、男性一般の家政への理解も進むかもしれない。家政学を男性にも開放せよとは面白い視点だ。ちなみに、教育学部の家政科は男性も受験できる。かつて受験したが合格できなかった男子高校生を知っている。

●藤色●(京都府)

しりとり、の次はりんごの帰り道

*学校帰りの生徒だろうか、買物帰りの親子だろうか。時間に余裕のある帰り道。自然

と尻取り遊びがはじまる。

●まぢりこ●(埼玉県)

新人の僕を飲みに誘って
帰り際

ホームで

ずっと敬礼してた部長

今何しているかな

*長く一緒に仕事をした部長ではなく、すれ違うような淡い関係だったのだろう。しかし、新人の私に「ずっと敬礼してた部長」の戯けた姿に、親しみ易く優しい人間性は現れている。懐かしく長く印象に留まるのはこういう人だ。

●岡田佳子●(京都府)

ねえ、お母さん

この白い線から出たら

わたしたち

きっと食べられちゃうのよ

*この白線は道路に引かれたものか、ホームに引かれたものだろう。子どもはそれぞれの物語を生きている。これは語りかけられた母が、その物語の一端に触れた瞬間である。

●大橋弘典●(群馬県)

ボールペンこんなに卒業と書ける

* ボールペンの試し書きだろう。いつもなら、意味のない曲線などを書くのに、卒業期の思いが重なって、「卒業」と書いてみたのである。卒業の複雑な思いを端的に表現していて、印象的だ。

●真島●(京都府)

三月の終わりは
四角い砂糖のようで
きれいな別れをぐるんと混ぜる

* 別れにも色々あるが、ここでの三月の別れは、年度終わりの卒業や転勤、転居によるものだろう。2行目、3行目の比喩が澄んだ寂しい思いを伝えている。